

元気と笑いのある人生

桂 米助(ヨネスケ) 氏(落語家・タレント)

「突撃!隣の晩ごはん」というテレビ番組を30年やりました。日本の、世界の晩ごはんを6000軒以上見てきて、日本の食文化は最高だと思います。日本人は一つの食材を様々な方法で調理します。例えば魚。生で、煮て、焼いて、蒸して、干して、揚げても食べる。野菜は漬物にもします。さらに、盛り付けや食器にもこだわって、季節感とともに目でも味わいます。

ところが、最近の日本は外国文化ばかりを取り入れて、日本の文化を捨てているように思えます。

夏、エアコンで快適に過すのは文明です。一方、打ち水やすだれ、風鈴、食卓のソーメンなど、五感で涼をとるのが、日本の文化です。コロナの世の中、世知辛い世の中にあって、ほっと心の安らぎになるものこそが、私は文化だと思います。

このままでは、やがて落語はできなくなるかもしれません。言葉が分からなくなるからです。例えば、お鉢。飯びつのことですが、今は電子ジャーに取って代わられました。「お鉢が回る」という慣用表現は、やがて通用しなくなるでしょう。七輪が分からなくなったら、古典落語「目黒のさんま」はもうできません。

落語家は前座、二ツ目、真打ちと昇進します。二ツ目になると、初めて紋付き羽織が許されます。羽織の正面には紋が二つ。二ツ目の由来です。昔の高座には照明用だろうそくを立てました。寄席が終わると芯を打って消したことから、真打ちと呼ぶようになりました。

落語や相撲、歌舞伎の世界は、今も日本の文化を守っている、日本の文化そのものです。

私たちはすり減らす意味の「磨(す)る」という言葉を嫌い、「当たる」を使います。スルメをアタリメと呼ぶ理由です。千社札を斜めに張るのは、右肩上がり祈ってのこと。落語や相撲、歌舞伎の文字が太いのは余白を埋める験担ぎ、大入り満員への祈りです。

粹(いき)という字は、米に九十と書きますが、実は八十九番目を表しています。コメは八十八の手間をかけて育てます。腹が満たされ、豊かになった次の段階。八十九番目にあるのが粹という文化です。



あらためて日本の文化を考えてください。その素晴らしさを子から孫、ひ孫の代へ伝えていけば、日本は必ず世界に誇れる文化国家になります。

ところで、元気と健康は違います。私の歳になれば、体のどこかしらにガタがくるものです。それでも外へ出て、友だちとおしゃべりしたり、お茶を飲んだりしてください。それが元気というものです。今日のセミナーを近所の人たちと話題にして、元気になって、そして日本の文化を次代へしっかり伝えてください。

桂 米助 かつら・よねすけ

日本テレビの「突撃!隣の晩ごはん」では、全国津々浦々の家庭をいきなり訪問。アポなしながら、人情味あふれるキャラクターで幅広い年齢層に親しまれる。また、独特の野球論で、野球ファンを魅了する。本職の落語ではヨネスケ流「野球落語」を創作、披露している。寄席を数多くこなし、講演会やトークショーなども全国各地で行っている。